【5】パーリ文献の伝承

［0］釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったとする伝承は、北伝では後世重要な意味をもったようであり処々に散見されるが、南伝には言及がない。パーリ文献ではニカーヤや律だけでなくアッタカターも含めて、釈尊が摩訶迦葉に半座を分かったとする資料は皆無である。根本分裂以後の後世に成立した伝承なのであろうか。それとも古い伝承が南伝には伝わらなかった、もしくは、伝わったが重視されずに忘れ去られたとも考えられよう。明言できないのは、パーリにおいても釈尊がある仏弟子に半座を与えたとする伝承が知られていた可能性があるからである。

［1］それはデーヴァダッタに関する伝承に見られる。『パーリ律』の「破僧犍度」（vol. II　p.200）に、五事を掲げて破僧を引き起こし象頭山に去ったデーヴァダッタとそれに従った 500 人の諸比丘のもとに、釈尊によって舎利弗と目連が派遣される場面が描かれている。舎利弗と目連がやってくるのを見て、デーヴァダッタは舎利弗に半座をすすめる（sāriputtaṃ upaḍḍhāsanena nimantesi）。舎利弗はそれを断ってある座をとって坐る。デーヴァダッタは背中が痛いと言って舎利弗に説法を代わってもらい、寝てしまう。その間に舎利弗と目連は 500 人の諸比丘を教誡して竹林に連れ帰る。

［1-1］これはデーヴァダッタが釈尊のものまねをした場面とされる。『パーリ律』には「ものまね」であるとは表現されていないが、*Jātaka-A.*では、デーヴァダッタが「背中が痛い」などと言って舎利弗に説法を代わってもらう行為 (1) が釈尊の行為をものまねしたものであると記されている。

Jātaka-A. 143‘Virocana-j.’（vol. I　p.490）では『パーリ律』と同様に破僧の場面で、デーヴァダッタが「善逝の姿を示しつつ（sugatālayaṃ dassento）」背中が痛いと言って寝てしまう。*Jātaka-A.* 335‘Jambuka-j.’（vol. III　p.112）も同様である。具体的に何をしたかの記述を欠くが *Jātaka-A.* 160‘Vinīlaka-j.’（vol. II　p.038）、*Jātaka-A.* 204‘Vīraka-j.’（vol. II　p.148）、*Jātaka-A.* 210‘Kandagalaka-j.’（vol. II　p.162）にもデーヴァダッタが「善逝の姿を示した」とある。

*Jātaka-A.*の資料では、デーヴァダッタが舎利弗に半座を提供しようとしたことが記述されていないために、『パーリ律』に記されたデーヴァダッタが舎利弗に半座を提供しようとする行為が、背中が痛いと言って寝てしまうことと同様に釈尊のものまねであるか否かは不明である。他の律においても *Jātaka-A.*と同じく、デーヴァダッタが背痛を訴えて舎利弗に説法してもらうくだりのみ記され、舎利弗に半座を勧めたことには言及がない (2) 。ただし『十誦律』や『根本有部律』「破僧事」は背痛を訴えて説法を代わってもらう行為の他に、舎利弗・目連を歓迎して右手を挙げて「善来」と呼びかける行為や舎利弗のかわりにコーカーリカを右に目連のかわりにカンダドラヴヤを左に置いて比丘衆に説法することをものまねの行為として加えている (3) 。

明確ではないものの、『パーリ律』に記されたデーヴァダッタの舎利弗に半座を分かつ行為が釈尊のものまねであるとすれば、釈尊が誰かある仏弟子に半座を与えたことがあったことになる。

（1）背中が痛むと言って釈尊が舎利弗などの比丘に説法を代わってもらう場面は、原始仏教聖典資料中に数多くある。舎利弗にかわってもらうものとしては *DN.* 033‘Saṅgīti-s.’（vol.Ⅲ　p.209）、*AN.* 010-007-067（vol.Ⅴ　p.123）、*AN.* 010-007-068（vol.Ⅴ　p.126）、『長阿含経』009「衆集経」（大正 01　p.049 下）、『長阿含経』010「十上経」（大正 01　p.052 下）、『中阿含経』088「求法経」（大正 01　p.569 下）、『増一阿含経』026-009（大正 02　p.639 上）があり、目連に代わってもらうものとしては *SN.* 035-202（vol.Ⅳ　p.184）、*SN.* 035-202（vol.Ⅳ　p.182）がある。

(2)『四分律』「破僧犍度」（大正 22　p.909 下）；爾時提婆達多在伽耶山中與無數衆圍遶説法。遥見舎利弗目連來、即言、善來、汝大弟子、雖先不忍而今忍者雖後而善。舎利弗目連到已敷座而坐。爾時提婆達多於大衆前如佛常法、告舎利弗、爲衆僧説法。我今背痛小自停息。時提婆達多法像世尊、自襞疊僧伽梨爲四重、以右脅著地。猶如師子。不覺左脅著地。猶如野干偃臥鼾眠。

『五分律』「破僧法」（大正 22　p.164 上）；舎利弗目連既至。調達便言。善來、舍利弗目連可就此坐。語言。若人有智先所未聞聞便受行。汝等先是沙門瞿曇第一弟子。今復來爲吾作第一弟子不亦善乎。舍利弗目連默然不答。調達便謂已受其語。即効佛常法、告舍利弗目連。汝可爲衆説法。吾背小痛當自消息。便四疊僧伽梨枕之。右脇著地累脚而臥。不繫念在前須臾眠熟。轉左脇著地呼聲駭人。

(3)『十誦律』「調達事」（大正 23　p.265 中）；爾時調達遥見舎利弗目連來、心大歡喜作是念。瞿曇沙門第一好大弟子二人今轉屬我。如佛見舎利弗目連來時、擧右手言。善來、舍利弗目連。調達亦爾。見舎利弗目連來、亦擧右手言。善來、舍利弗目連。即遣右俱伽梨安舎利弗。遣左迦留羅提舍安目連。如佛在衆中語舎利弗目連。汝等爲衆説法。我脊痛小息。調達亦爾。在衆中語舎利弗目連。汝等爲諸比丘説法。我脊痛小息。如佛四褻欝多羅僧敷、以僧伽梨作枕、右脇臥。調達亦爾。四褻欝多羅僧敷、以僧伽梨作枕、右脇臥。時有天神、深愛佛法故、令調達睡。轉左脇臥鼾睡癩語。嚬呻振擺斷齒作聲。

『根本有部律』「破僧事」（大正 24　p.203 上）；時提婆達多作佛威儀爲衆説法。孤迦里迦在右邊坐。褰荼達驃居在左邊。時提婆達多遥見大徳舎利子目揵連來、便作是念。我已成一切智人。而此大徳入我衆中、即遣左右侍從令起。即遣舎利子目健連左右而坐。時孤迦梨迦褰荼達驃、既被強移坐處心生瞋恨、善自思惟。我等有大過失助破僧衆。若欲不起恐被瞋打、便即移處。遣大目健連并舎利子居在左右而坐。提婆達多告舎利子曰。我今背痛。汝爲大衆演説妙法。爾時舎利弗默然受請。提婆達多説此語已。便疊僧伽胝支頭右脇而臥。時舎利子以神通力。令遣仰眠不令覺知。（*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādin*, ed. by Raniero Gnoli, Roma, 1977, Part Ⅰ, p.207）

［2］パーリの文献でもう一つ注目すべきは‘buddhapaṭibhāga’という言葉である。

ニカーヤと律にはないが、*SN.* 016-010（vol.Ⅱ　p.214）〈13-1〉の註釈である *SN.-A.*（vol.Ⅱ　p.175）*〈13-1〉*において摩訶迦葉が‘buddhapaṭibhāga’と呼ばれているものである。

［2-1］*SN.* 016-010 は【4】-［2］に示した、摩訶迦葉の半座に言及する『雑阿含経』1143 の対応経である。

阿難が摩訶迦葉とともに比丘尼たちのところへ行き、摩訶迦葉が比丘尼たちに説法をする。それを聞いていたトゥッラティッサーが「よくもまあ阿難様の面前で、もと外道の摩訶迦葉が説法できるものだ」といった内容の誹謗をなし、摩訶迦葉がこれはいったいどう

したことかと阿難に説明をもとめる。阿難は摩訶迦葉に「がまんしてください」と言って宥めるが、摩訶迦葉は阿難の言葉を「やめなさい」とさえぎり、自身が釈尊によって諸比丘の前で釈尊と同等に心解脱、慧解脱、の境地に達していると言われた（*SN.* 016-009 vol.Ⅱ　p.210）ことを阿難に述べる〈13-1〉。

［2-2］*SN.-A.* は、阿難が摩訶迦葉に比丘尼に説法するように請うたのは‘buddhapaṭibhāga’である摩訶迦葉の法話を比丘尼がよく信じるだろうと考えてのことであったといい、また摩訶迦葉が阿難の言葉をさえぎったことについて註釈して、阿難が一比丘尼の言葉をさえぎらずに、‘buddhapaṭibhāga’である摩訶迦葉の言葉をさえぎってしまったことから、摩訶迦葉は僧伽が阿難にいらぬ嫌疑をかけないように配慮したとする。また摩訶迦葉は自身が‘buddhapaṭibhāga’であることを明かすために阿難に、自身が釈尊から釈尊と同等に禅定・神通を得ていることを認められたことを宣言する〈*13-1*〉。

［2-3］この‘buddhapaṭibhāga’という複合語の後分の‘-paṭibhāga’は PTS の *Pāli-English Dictionary* によれば① counterpart, likeness, resemblance, ② rejoinder, ③ counterpart, opposite, contrary といった意味があるが、ここでは①の「～のような」という意味で用いられている (1)。‘buddhapaṭibhāga’は「ブッダに似ている者」「ブッダのような者」という意味になる (2)。

『雑阿含経』1143 には摩訶迦葉が釈尊から半座を提供されたことが述べられている。その対応経である *SN.* 016-010 には「半座」は言及されていないが、そのアッタカターにおいて摩訶迦葉が‘buddhapaṭibhāga’「ブッダのような者」と呼ばれているのは、「半座」と‘buddhapaṭibhāga’の間の関連を窺わせる (3)。

（1）例を挙げると、dasabalassa brahmasarīra<u>paṭibhāgaṃ</u> rūpaṃ「十力（仏）の梵天の身体のような容姿」（*Jātaka-A.* 230‘Dutiyapalāyi-j.’vol.Ⅱ　p.219）；bhantamiga<u>paṭibhāgo</u> kiso「迷走する鹿のように痩せた」（*Jātaka-A.* 230‘Ummadantī-j.’vol.Ⅴ　p.209）などがある。

（2）ちなみに如来は「無比のもの」であるという意味合いで‘appaṭibhāga’という表現が用いられることから考えれば、‘buddhapaṭibhāga’は逆説的な表現である。例えば *AN.* 001-013-001～007（vol.Ⅰ　p.022）；「諸比丘よ、唯一の人が世に出現する。彼は二人とおらず（adutiya）、仲間がおらず（asahāya）、似た者がおらず（appaṭima）、対等の者がおらず（appaṭisama）、<u>等しい者がおらず</u>（appaṭibhāga）、比肩する者がおらず（appaṭipuggala）、等しい者がおらず（asama）、無等等であり（asamasama）、人間の最上者である。それは誰か。如来……である」。

（3）‘paṭibhāga’の意味を動詞に戻って考えるならば、パーリ語では的確な用例が見出せないので仏教梵語の語形で見ると、‘pratibhajati’には「分ける（divides）」という意味がある。*Mahāvastu*（vol.Ⅱ　p.042）で菩薩の誕生の際にやってきたアシタ仙が以下のように言う。

sukhitā ime naramarū drakṣyante gaṇavarasya madhyagataṃ /
amṛtaṃ <u>pratibhajamānaṃ</u> ahan tu jīrṇo ti rodāmi //

これらの幸運な人々と神々は、〔ブッダが〕最上の群集（僧伽）の真ん中に行って、甘露を分けるのを見るであろう。しかし私は年をとっていると嘆く。

‘-paṭibhāga’が「～に似た者」という意味になるのは、何かの要素を分かち合うといったところから成立するのではなかろうか。